

それらの結果から新たなシステムを検討した内容を発表した。

4. 小児血液科における臨床心理士のかかわりについて—母と子のこころをささえる—

丹羽早智子, 大下 智子

(名古屋第一赤十字病院小児科 臨床心理士)

当院において臨床心理士が、平成 20 年より入院児や家族（主に母親）への心理的な支援を行うことが増えてきた。そこで、入院児および家族への心理的支援の報告と、臨床心理士がかかわることの意義について検討したい。担当医師からの紹介でかかわり、ニーズに合わせて、面接はベッドサイドで母子一緒にかかわることも多い。面接では母は今後の病状への不安や子どもとのかかわりに関することなどが語られることが多く、子どもはストレスの多い生活であり、遊びを通じて表現していた。また母と子は、お互いの思いが影響しあい、関係が悪循環になりやすい場合も見られた。臨床心理士は医療スタッフの一員であるが治療に直接かかわらないため安心してさまざまな思いを表現する相手となりえた。また母子それぞれの思いを受けとめ、関係性をよみとり、思いを語る場を提供し、過去や現在の思いを整理することでよりよく過ごせるよう支えていく役割があると考えられた。

5. トータルケアワーキングの活動報告～2つの事例を通して～

山内 唯子

(名古屋大学医学部附属病院 5 E 病棟)

当病棟には、小児がんで長期の入院治療を余儀なくされる患者が多い。しかし、部署全体として患者家族へのかかわりを検討する場がなかった。そのため、平成 19 年 1 月に、患者家族のトータルケアを検討する場として、TCW（トータルケアワーキング）を発足。医師、看護師、臨床心理士、薬剤師、CLS で月 1 度、開催している。今回この TCW で患者家族へのはたらきかけを行った 2 事例を紹介する。1 例目は、TCW で検討の結果、できるかぎり家族と一緒に過ごせるように

さまざまな調整を行った。家族からは、対応への感謝の言葉が聞かれた。2 例目は、本人の夢が“家族で水族館へ行く”であった。他職種で協同し夢の実現ができた。児・家族ともに喜んでくれた。TCW で、多職種のスタッフによる検討の場が持てたことにより、多くの情報を得て、全員が同じ目標に向け、タイムリーに効果的な介入ができたと考える。今後はさらによりよい介入ができるよう TCW を充実させていきたい。

特別講演

小児がんのトータルケアの実現に向けて

～今、何をなすべきか～

(大阪府立母子保健総合医療センター)

河 敬世

第 55 回東海小児がん研究会

日 時：2009 年 2 月 21 日(土)

場 所：愛知県医師会館地階 1 階講堂

世話人：矢崎 信

(名古屋市立東部医療センター東市民病院
第一小児科)

【I】病理検討

1. 発症時より多発肺転移、骨転移をきたした下顎骨腫瘍

坂本 昌彦, 高橋 義行, 村松 秀城

西尾 信博, 永田 俊人, 濱 麻人

小島 勢二

(名古屋大学大学院医学系研究科 小児科学)

藤本 保志

(同 耳鼻科)

重富 俊雄

(同 口腔外科)

長坂 徹郎

(名古屋大学医学部附属病院 病理部)

伊藤 雅文

(名古屋第一赤十字病院 病理部)

【症例】12 歳、男児。平成 20 年 7 月頃から左耳